

# バンクーバー物語

## Tail of Vancouver

作

邑仲宙道

Centroville Pathman

起稿 2024年7月05日

再起稿 2025年2月10日

完稿 2025年3月05日

①アタイの名は“ドロのおしゃみ”。泥の中で見つかったシヤムネコだからね。“ドロ”がつくと凄味があってアタイは気に入ってる。どうして生まれたばかりで名前が分かるのかって、そりゃ、ネコの才能さ。アタイには母さんの記憶はほとんどないけど、母さんが「おしゃみ、おしゃみ」って呼ぶ声が今も耳に残っている。きっとはぐれたアタイを探して、母さんが呼んでたんだね。母ネコと子ネコは特別な会話ができるんだよ、まあ以心伝心の様なものさ。

そんなアタイが泥の中で泣いているのを女の子が見つけて、自分の家に連れて帰ったのさ。お蔭でアタイは命拾い。女の子の婆ちゃんがアタイを綺麗に洗ってくれ、元の美しいアタイに戻れたけど、この先どうなるか少しばかり不安だった。それから間なしに、婆ちゃんがアタイを懐に入れて、とてつもなく速い電車で遠くの街に連れてったのさ。アタイは右も左も分からないうちに、女の子から婆ちゃんへと引き回されて、もう目が回るようだった。着いたところは少しばかり賑やかな街だった。アタイは婆ちゃんの温かい懐で、いつの間にか寝てしまった。目が覚めると婆ちゃんの末娘がいて、アタイを愛おしい眼差しで見ているじゃないか。アタイはお愛嬌で微笑んでみせたけど、娘と婆ちゃんは何やら話し合っていて私の笑みに気付いてない。と、そこへおっさんが入ってきた。どうやらこのおっさん、娘の亭主らしい。親子ほども歳の離れた夫婦で、アタイはどやらこの夫婦の家に預けられるみたいだ。

夫婦には子供がないようで、アタイを随分かわいがったものさ。夫婦はアタイに「みりん」って名前を付けた。アタイは「ドロのおしゃみ」って立派な名前があるのに、こともあろうに「みりん」とは。ずいぶん貧乏くさい名前だね。みりん干しとかみりん漬けみたいで、この夫婦のセンスはどうかしてるね。まあこれからアタイの世話をさせるのだから文句はこのあたりでやめとこ。「みりん」て呼ばれてもアタイはこの夫婦に愛嬌をふりまいたさ。

②大事件勃発。最初の大事件はアタイの弟分になる子ネコがやってきたこと。ビビりのくせにやたら貴公子ぶった坊ちゃまで、本当は唯のヤンキーネコ。6月6日生まれで、ブリーダーたちに「むむ」と呼ばれてたみたい。うちの大ネコたちは「ラッコリン」って名前をつけたけど、このネコの鼻につくボンボンぶりと男爵ぶってるお姿から、アタイはボンボンとバロンを合体して「ボロン」と呼ぶことにした。語感もぼろネコでお似合いだよ。2つめの大事件は大ネコの家にも本物の赤ちゃんがやって来たこと。大ネコ夫婦に待望の女の子が生まれた。大ネコ母さんに短い間に長女、長男、次女と一挙に3人の子どもができたわけ。大ネコ父さんは医者で家の1階で診察をしている。こうしてアタイの家族は5人になって、結構賑やかで面白い生活になった。

アタイはこの家で平穏な日々を送り、年を重ねていくものと思ってた。ところが大ネコ母さんがとんでもない決心をした。カナダのバンクーバーという街にある大学に入学して

看護師になると言い始めたのさ。大ネコ父さんは歳も歳で、最初はバンクーバー行きにはタジタジだったけど、怖い大ネコ母さんと可愛い娘にほだされて、しぶしぶ同意した。ネコも大ネコも女の力恐るべし。大ネコ父さんは10年続けた病院をたたんで、金魚の糞みたいに大ネコ母さんに付いていくことになった。アタイとボロンの世話役の家族が引っ越すとなると、アタイたちは野良に戻る？嘘だろう。アタイの生まれはドロの中でも、このお家にいたお陰でお育ちは悪くないネコだよ。いまさら野良に戻れるわけもない。とってどこかの知り合いに預けられても嬉しくないしね。弟分のボロンは暢気なもんだ。何も気づいてない。本当にボンボンだね。

大ネコ母さんはアタイの心配を裏切って、そら恐ろしい行動に出た。なんとアタイとボロンを、一緒にバンクーバーに連れて行くことを決めたみたい。止めてよ。何考えてんだよ。あたいは生粋の日本生まれ、英語なんて話さないよ。ボロンはヤンキーだからちょっとぐらい話すのかなー、そんなわきゃない！あのあほネコに話せるわけない。あたいは飛行機なんて、怖くないけど、一度も乗ったことはないし。それどころか大ネコ母さんはアタイを動物病院に連れてって注射をするわ、首根っこにはけったいなカプセルを埋め込むわ、とにかく不快極まりないことの連続だった。

**③** そうこうする内にととうその日が来ちゃった。ボロンはビビリまくってチジミあがってる。アタイは向こう意気を張ってボロンに度胸のあるとこみせているけど、内心はびくびくもの。この世話係どうかしているよ。アタイらをちっちゃなケージに詰め込んで、車のトランクに押し込んだ。狭く暗く、ゴーゴーうるさく、ガス臭く、ガタガタ揺れて、全く反吐が出そうになった。ボロンは相変わらずうずくまって死んだのか生きてるのか分からない。アタイはボロンに声をかける気にもならない。車が止まってやっと静かになったと思ったら、小さな飛行場の中をカートで運ばれ、今度は飛行機！搭乗カウンターで小汚いトランク類と一緒にベルトコンベアに乗せられ、アタイたちは荷物扱い。馬鹿にするんじゃないよ。つまらない大ネコより上等に扱えとは言わないよ、せめて同じ位には扱えないのかい。

本当の地獄は車の比じゃなかった。飛行機というしろもの、荷物室はやたらでかくて、自分たちの居場所が全く見当もつかない。狭いケージの中で逃げ出すこともできない。突然、体がケージの片方に押し付けられ、ボロンなどは上下逆さになってケージの天井にへばりついてた。何が起こったの！突然、フワッと宙に浮かぶ。飛行機が飛んだ！まるで急坂を這いあがるように斜めってケージに爪立てへばりつく。やっと水平になった。この騒ぎで気付かなかったけど、耳をつんざくほどの爆音で生きた心地がしやしない。ネコ族の耳の良さ、どんなかわかってるだろう。ボロンは耳をふさいで蹲ってるけど、そんなじゃ、爆音防げないよ。安定したかと思うと上下に揺れ、右や左に傾き、命ビビらされ、あたしゃ、もうベロベロ。最後に地上に降りて荷物の受け取り場所のすみっこに放り出されて、あたしもボロンも物も言えないほどの体たらく。

大ネコ母さんが子分たちを連れてアタイたちのケージを見つけて飛んできた。あたいは完全にグロッキー、ボロンは半殺し状態。まあこの悲惨な状態を見て、ダメな大ネコどもは何も感じないのかい。お嬢ちゃんはアタイらをいたわるように見ていたけど、もう生きた心地はせず、二度と飛行機はお断り。時間がたって少し落ち着いてきたら、今度はまたも車のトランク。ダメネコどもは何を考えている！これがダメネコといわれる所詮だよ。車から降ろされるとビルの一角に。そこは検疫所のように。検疫官がアタイらをチェックして、たいそうな書類にハンコを押した。大ネコ母さんはそれを押し頂いてほっとした様子。これで旅の終わりかとホッとしていると、これが旅の始まりだった。

④あの地獄の騒音、悪臭、暗黒、振動が戻ってきた。ボロンはもはやこの世のネコじゃない。朦朧としている。二度目の飛行機は最初より長い時間飛んでいた。でも高感度の耳を持つ我らでも長時間となると慣れてくる。あの轟音が子守歌のように聞き流せる。ボロンは疲れもあり寝ている。我らは10時間の長旅の末に、地球の果てと思えるほど遠いバンクーバーに着いた。大ネコ母さんは一人張り切っている。大ネコ父さんは長旅に少々辟易しているが、まあ思ったよりは元気そう。一番元気なのは大ネコお嬢さん。ボロンも少し眠ったためか、最初の試練の時よりは元気がある。そしてこの国の検疫官を尋ねた。体のあちこちをつつきまわされた挙句、アタイは嫌な奴なのにネコなぜ声をあげる事態になるのかとうんざりしていた。ところが検疫官は椅子にあぐらをかいたままで、アタイらを見もしない。大ネコ母さんもさすがに苛立って検疫官にネコをみるかと聞くと、なんと検閲官は「Alive or Dead?」と聞いている。アタイらお尋ね者じゃないよ、なんて失敬な連中だ。ボロンはここでもビビってケージの中でちじこもっている。こいつは幸せな奴。いつでもビビっているうちにことが済んじゃう。アタイは真に頭にきたよ。何だい、遠路やってきたのに「生きてるか、死んでるか」って。「ふざけんなよ」とアタイは検閲官に下品だけど挑発咆哮、つまりさ、牙出して吹こうと思った瞬間に、そのまま通過。と、まあカナダでの初日はおちよくられて始まったのさ。

こうしてアタイと弟分のボロンは新天地にやってきたってわけ。アタイたちには迷惑な話さ。大ネコたちの勝手に付き合わされてさ。まあ、これもアタイらに何か役立つならそれもよしとするがね。バンクーバーという街で驚いたのは、アタイたちのように、大ネコどもにも色んな種類があるってこと。日本の大ネコたちには、毛並み、顔立ち、鳴き方、動作にあまり違いがないので、大ネコは似たり寄ったりの生き物と勝手に思い込んでた。ところが、バンクーバーの大ネコたちは毛や目の色、がたい、鳴き声など、それぞれえらく違っている。一方、アタイたちネコは一名一名すごく个性的さ。例えばアタイとボロンを比べても、雄雌の違いのほかに、アジア系と北米系、シャム族とアメショー族、黒白と黄地トラ、飛び込み型の多動ネコとたじろぎ型の自閉ネコなどの違いがあるよね。でもね、アタイたちネコは互いに違っているからといって何とも思っていない。ところが大ネコたちにはこの違いに特別な意味があると思ってるみたい。どの大ネコもアタイたちの目

から見れば大したものじゃないのに、自分が他より見場がいいとか悪いとか、毛色が好きだの嫌いだの、鳴き方がどうか、挙句の果ては持ち物まで他と比べて気にし、あって当たり前の違いを自慢しあっている。レベルの低い大ネコたちさ。そして、アタイらは大ネコみたいに互いにうるさく鳴き合わない。ネコ語は万国共通で、ケンカも恋もネコ同士ならどこでも通じ合える。そう、ネコはグローバルな生き物さ。

バンクーバーの多種多様な大ネコたちは、大概、群れをなして暮らしてる。よく見ると同じ毛色で同じ鳴き声の連中が群れやすい。群れごとで餌も違うみたい。厄介な連中だね。アタイらはありがたくなんでも食べるよ。時に腹をこわして難儀もするけど。それなのにネコの流儀で勝手にご馳走をいただくと、怖い顔の大ネコがやってきてひどい目に合わされる。大ネコたちには仲良く食べるという文化がないんだね。それから、ネコ社会でもボスネコがブイブイいわせて威張っているけど、アタイらはボスネコが偉いとはだれも思っちゃいない。うっとうしい存在だけど、ケンカして怪我しても仕方ないしね。ところが大ネコたちはボスを持ち上げてペコペコ、反発してキリキリ、顔合わさずモジモジ、互いにもっと自然な係りあいができないものかね。

⑤家ネコの連中は、住まいは確保されているけど、自由な生活はできないよね。アタイも元は野良だったけど、今は家ネコでおとなしく食っちゃ寝の生活をしている。だからといって野良はみじめでも何でもないよ。ただ寒い日や雨の日だけは軒先や床下を使って我慢するけど、そんな時には炬燵のある部屋を恋しく思うよ。驚いたことに、大ネコにも野良がいる。バンクーバーでは下町に行くとも野良が集まって暮らしている。何よりも自由を大事に思うネコ精神を持った連中さ。大ネコどもは金を払って家で暮らすと聞いたよ。どこに住もうと自由なのに大ネコはいちいち金を求める。世知辛い奴らだ。その金を持たない連中が野良をするとも聞いた。本末転倒だよ。金がないから野良をするんじゃないで、野良をするから金がいらぬのさ。

大ネコの生活はそれなりに大変かもしれないけど、大ネコが我らネコ族に奉仕をするという役割を忘れてる奴がいる。大ネコの大切な役割は、毎日食事を準備すること、毎日トイレを掃除して気持ちよく用が足せるようにすること、ソファやベッドを用意して気持ちよくいつでも居眠りができるようにすること、などは基本中の基本。大ネコどもよ、忘れるな。中にはこの役割を放棄する大ネコもいると聞いて、呆れたね。大ネコの役割を放棄したらもはや大ネコではないよ。ただの馬鹿ネコさ。ああ、やだよ。

最後に、ネコは生まれながらのお洒落好きだということを忘れないで欲しいね。爪も手触りのいい壁で磨き、咬み心地のいい紙や布で歯磨きをし、ネコ戦車をしてマットでお尻のケアもする。毛繕いは忘れてはならないネコマナー。それで毛玉を吐いたら片付けるのは、無論、大ネコの仕事。アタイらがボケネコになったら、毛繕いをするどころか寝てばかり。ボケネコ介護も大ネコの仕上げ仕事、忘れるなよ。

⑥かくしてアタイと弟分のボロンはバンクーバーに連れてこられて、やっと終の棲家を得たという訳。世話係の大ネコたちにとっては、この家はお尻擦り合わせて過ごすほど狭いかもしれないけど、アタイら真っ当なネコにはちょうどいい広さ。ボロンは爪とぎ板の下かソファの肘掛の上で、鼾かいて居眠り。目が覚めるとボロンの野生が蘇り、1階と2階を走り回り、ありもしない獲物を追って一人で騒いでいる。まあこの程度ならいいけど、時に何を勘違いしてか、アタイをめがけて追ってくるのがあって本当に難儀な奴。アタイも応戦してアタイの可愛いしっぽをいやらしいほど膨らませて、まるで狸さ。それがボロンには面白いのか余計に嬉しがって追ってくる。本当にどうしようもないガキだね。オスネコは大ネコもそうだけど、幼稚でどうしようもないね。

アタイはドロのおシャミ、大ネコの前でも鉄火な姉さんよろしくブイブイならしていたけど、今は歳なのかね、体を動かすのが億劫で静かに寝ているのが一番。それなのに大ネコがやって来て、休んでるアタイを抱き上げ、見たくもない面を見せられてにらめっこさ。さらに背伸び体操をさせられ、本当に嫌な奴たちだよ！まあそれでも大ネコらはアタイらの世話係だから無下にはしないよ。できるだけ愛想もしてるつもり。大ネコが寝てたら、そのお腹や腰の上に陣取ってアタイも休んだりしてる。大ネコも体の上に乗られるのが嫌ではないらしく、「可愛い」と言って大層ご機嫌さ。まあこんな生活がこの異国でも始まったわけさ。

⑦バンクーバーもやっと春めいてきた。アタイはいつも通り窓辺で中庭を眺めながら、静かな生活の中に入り込んで自然を楽しんでいた。隣家の軒下には、丸々太った美味しそうな鳩が巣づくりしている。せっかちなリスが大きなしっぽを丸めて、塀の上でストップモーションのように走ったり止まったり。空にはカモメが飛行し、アタイをひどい目にあわせたデカ犬たちも、飼い主を引きずり回しながらアホずらして散歩している—オツと愛犬家の方には失敬—。ここはアタイたち真っ当な生き物が暮らすにはいいところかもね。「そう思わない？」とボロンに声をかけたら、相変わらず鼾かいて寝てる。ネコの風上にも置けない困った猫だよ。外の風景を見てアタイの野良の心がうずくと、大ネコが玄関を開けた隙に、アタイは外に飛び出す。すると大ネコども、裸足のまま大慌てで追っかけてくる。かわいそうだから逃げるのをやめて、大ネコに捕まえさせてやるのさ。大ネコは「外に出ちゃだめじゃない。」とえらい剣幕。まあアタイのストレス発散にちょうどいいスリルだけど。

ある日、いつものように窓から外を眺めてると、一匹の黒リスが窓辺にやってきた。アタイをおちょくりに来たのなら承知しなよ、といかめしい顔をしたら、そやつアタイを見てニコニコしてるのさ。何だいこの毛むくじゃらネズミ。アタイが呆れていると、リスが「ねえさん、どこから来たの？」と尋ねた。アタイはびっくり仰天。ネコ同士なら言葉は通じるけど、この珍奇なリスとも話ができるとは。いや、よくよく考えるとこれは声の会

話じゃない。心で通じているのだ。試しに「なにさ、坊や。」と心で答えてみた。するとリスが「僕、この辺りに住んでいるんだ。名前はポンタ。」またまたアタイはびっくり。他の動物とも心で会話ができる。これは大発見、アタイたち天然の生き物は心で通じ合える術を備えているんだ。大ネコはこの術を失っているようだけど。やっぱり大ネコは動物界の外れ者なんだね。

⑧ そんなこんなでアタイとポンタは仲良しになった。数日してポンタが血相を変えて窓辺にやってきた。「どうしたの。」と聞くと、アライグマがポンタの巣を狙って母さんと父さんが撃退しているとのこと。助けに行きたくとも家から出られず、どうしたものかと困っていると、ポンタが家の抜け道を知っているというので教えてもらった。なんと2階の物置の奥に小さな抜け穴があってそこから出られるらしい。早速、応援に出ることにした。側で相変わらず麩をかいているボロンをみると、その気楽さに腹が立ち無理矢理、連れていくことにした。こんな時にボロンの野性を発揮して頑張らなきゃ、ボロンの生きている意味がない。ボロンを起こすと迷惑そうに起きてきた。簡単に事情を話して「ポンタ家族を助けに行くよ。」と誘うと、ボロンのやつ「ご苦労さん。」って間の抜けた返事。アタイは腹が煮えくり返ってネコパンチを数発、ボロンの頭に炸裂させた。びっくりしたボロンは「何すんね。姉ちゃん！」と仏頂面。「いつまでも寝てるんじゃないよ！」と喝を入れてやった。

アタイとボロンはポンタの案内で両親の住む木の巣穴に走った。幸いアライグマはその場を離れていて、辺りは静かだった。ポンタが心配そうな声を上げると母リスが巣穴から顔を出した。ポンタは急いで巣穴に登っていった。アタイとボロンはただ巣穴の方をポカンと見上げてた。そこにアライグマが戻ってきた。アタイとボロンはかっこよく迎撃態勢をとったさ。けどボロンは少しづつ後ずさりして逃げ腰になってる。アライグマはボロンがひるんでいるのを見て、攻撃対象をアタイに向けてきた。アライグマはいきなり右手パンチ、アタイはそれをうまくかわし、炸裂パンチをアライグマの頭に一撃。アライグマは少しひるんだ。アタイは次の攻撃の機会を見ていると、ボロンがアライグマのお尻に咬みついた。不意を襲われたアライグマがボロンに反撃しようとした隙に、アタイの二撃目がアライグマの眉間に命中。

勝負あり。アライグマは慌てて逃げ出そうとしたけど、ボロンがしっかりとお尻に咬みついていて逃げることもできない。アライグマは両手を上げて降参の姿勢。アタイたちはアライグマに今後リスたちを襲わないと約束させるのにどうしようかと思案してた。するとアライグマが「ご勘弁を。もうリスたちを襲うことはしません。」と答えた。アタイはアライグマとも心で話ができるのに驚いた。ボロンは今頃になってアライグマに威嚇のポーズをとってアライグマをビビらせてる。アタイはアライグマに話しかけた。「リスを襲わない約束として私たちの仲間におなり。」アライグマは「そう致します。私の名はラックといいます。」と答えたので「アタイはドロのおシャミ。こちらは弟分のボロン。アタイたちの

互助同盟クープの絆は固いから。いいね。」とその場の思い付きでしゃべってた。ボロンは何のことかとポカンとしていたよ。そして、動物たちが共有している心の会話を、アタイはちょっぴり気取って「テレボイス」と名付けてみた。

⑨こんなアタイの思い付きで、動物互助同盟クープが生まれたのさ。アタイとボロン、リスのポンタ、アライグマのラックのたった4名のクープメンバーは近所のパトロールをして、困っている動物がいなか見回った。1ヵ月もしないうちに、カモメのジョナ、カラスのクロッキー、コヨーテのヨッテル、マガモのクミなど、多くの動物が新メンバーになり、メンバー数は30名近くになった。クープの集会には各動物の代表が評議員として出席し、近くにある公園の野外休憩所で深夜に行くことになった。勿論、大ネコどもはこの集会には参加できないよ。その理由の一つは、メンバーの多くが大ネコを嫌っているからさ。二つ目に大ネコは独自の言語を作ったので、動物たちが共有しているテレボイスを失って、動物たちとコミュニケーションができなくなった。それでも極少数の大ネコはテレボイスで動物たちと会話ができる。シンデレラもその一人。シンデレラが動物たちと話をしたのはお伽噺じゃないよ。

ある日の会合でカモメのジョナがこんな報告をした。バンクーバーから東に60km程行ったところに動物の収容キャンプがあり、捕囚されている彼らもクープメンバーになりたいと言っているとのこと。現在、クープメンバーは動物種で25種、個体数で500名近くになっている。ジョナの報告を聞いてクープ評議員は意見を出し合った。その中には、これ以上メンバーが増えると運営が難しいという消極的な意見、動物収容キャンプには自分たちが餌にされそうな動物もいるので危険ではないかという反対意見もあった。結局はクープ評議員が収容キャンプを尋ねて彼らと話し合いをもち、参加を認めるかどうかを再検討するという事になったのさ。

最大の問題は60kmの距離をどうやって移動するかだ。カモメのジョナとカラスのクロッキーは、小さな籠に1, 2名の動物が乗り、15羽のカモメか30羽のカラスが紐で吊り下げて運ぶという案を話した。この方法だと天候がよければ2~3時間でキャンプに到着できるとの予測。もう一つの案はフレイザー河を遡行して、途中のネイサン・クリークから内陸に上がり、後は徒歩で収容キャンプへ行く案だった。話し合いの結果、第2案を採用することになった。このため遡行用の筏をどのようにして入手するかが問題になった。するとカモメのジョナがスティーヴストンに木材集積場があり、ラッコの力を借りて筏を作れるかもしれないと話した。スティーヴストンはバンクーバーの南にあり、フレイザー河河口近くの町とのこと。スティーヴストンまでは馬のウィリーが荷車を引いて動物たちを運ぶことになった。

⑩全ての段取りが着々と進められ、出発の夜が来た。アタイとボロンはしばらく家を留守にするため、大ネコにそのことを伝えたいと思ったけど、伝達の方法がない。仕方なく



アタイはすぐに戻ってくることをネコ戦車で床に記し、ボロンはソファの上に吐いた毛玉でしばらく留守にする目印にした。それでも大ネコたちには理解できないと思うけど。そして夜中、いつもの集合場所に皆が集まり、ウィリーの準備した馬車に乗り込んだ。馬車がゆっくりと動き始め、皆は急に黙り込んだ。これから出会う冒険の不安と期待が入り混じったものだった。

明け方、スティーヴストンに到着。港から少し外れた岸辺にラッコたちが丸太5本を結び合わせて筏を用意していた。ラッコの隊長ベロッコにお礼を言うと、ベロッコもクープメンバーに加えて欲しいとのこと。無論、評議員全員、快諾したさ。その後、彼らが筏を押ししたり引いたりして、筏は河の上流に向けて動き始めた。しばらく進むと、ビーバーたちが加わって筏を押ししてくれた。そのお陰で筏はゆっくり川上に向けて進んでいった。河口あたりは広々としてまるで入江のよう。やがて両岸が望める河幅になり、様々な船が岸に繋がれているのが見えた。中には大きな鉄鋼船もあり、木材や大量の穀物などを運んでいるのかな。

幾つかの橋をくぐり抜けたが、早朝のため車や人通りは少なく、アタイらの筏に気付く者は少なかった。陽も上がり周囲が明るくなると、人も車も増え、時折、橋の上からアタイたちの筏を見つけ、ノアの箱舟でも見たように物珍しがっていた。そうこうする内にカナダ沿岸警備隊の船が私たちを見つけ、接近してきた。彼らは筏にクサビを打ち込み、筏を警備船に固定した。筏には何種類もの動物が乗っているのに、人の姿が見えないことに警備隊員たちは不思議そうにしていた。アタイはクープ代表として大ネコの隊員に呼びかけたが、隊員たちはアタイが愛嬌を振っていると思ったのか、アタイを抱き上げて認証ストラップをネコじゃらしにして隊員仲間と遊び始めた。艦長らしき隊員は無線で誰かと相談している。相談が終わると隊員たちを集め、出発するように指示をした。アタイらの筏は曳航されて、やがて近くの船着き場に着いた。

⑪船着き場には、大きなトラックが待っていた。そしてアタイたちは警備隊員に誘導されてトラックに乗せられた。アタイたちはどこに連れていかれるのか、仲間同士で心配をしていた。でも誰も騒ぎ出すこともなく落ち着いた行動をとった。トラックが動き出して10分ほどすると、トラックの荷台の屋根をトントンとつづく音が聞こえた。それはカラスのクロッキーだった。アタイはしっぽでトラックの壁を叩いて応じた。クロッキーは賢い鳥で、大ネコたちが考えているよりもずっと大ネコの言葉を理解している。クロッキーの話では、大ネコたちはアタイたちを動物の収容キャンプに運ぶとのことだった。何と勞せずアタイたちは収容キャンプに行けることになった。

小一時間ほどトラックに揺られて昼頃にキャンプに着いた。想像したよりも中は広い。トラックはゆっくりとキャンプ内の道を進み、やがてフェンスの張ってある一角に着いた。警備隊員とキャンプ職員がアタイたちをトラックから降ろし、檻の中に誘導した。ア

タイらは無言で彼らの指示に従い、フェンスの中に入った。フェンスの戸が閉められ、アタイたちは囚われの身になった。それでも誰も慌てなかった。なぜなら、皆、ある程度想定していたこと。そこへカラスのクロッキーが飛んできて状況を説明してくれた。警備隊員は基地に帰り、引継ぎの済んだキャンプ職員は集まって今後の扱いを相談しているとのこと。

アタイたちもこれからの作戦を相談した。まずはクロッキーのカラス集団に頼んでキャンプ場内にいるすべての動物にクープメンバーになる意志があるかを尋ねることにした。カラス軍団はキャンプ場内に散らばり、アタイたちは彼らの報告を待つことにした。その後、クープ参加希望者やその代表者を私たちのフィールドに集める方法について相談をした。クロッキーの情報によると、キャンプ職員の中にアタイたちのテレボイスを感知できる者もいるのでその職員を探すことにした。この役割にはカモメのジョナの集団に頼むことにした。カモメのジョナたちは一斉に飛び立ちそれぞれの動物の担当職員を探した。

⑫カモメたちは次のように作業を行った。まず動物フェンスに留まって担当職員の現れるのを待つ。担当職員が来るとテレボイスで呼びかける。何も気づかない者ははずれ、カモメの方に振り向き、さらに近寄ってくると脈あり。次に自己紹介をして職員の名前を聞く。これに職員が答えられると合格。黙って見ているだけの者や、カモメを追い払おうとする者は無論不合格。テレボイスの試験に合格した職員には、明日 15 時に漂流動物の収容檻に招待する。これに応じない場合にはその理由を尋ね、説得の余地がある場合にはもう一度招待する。

カラス軍団が戻ってきた。動物たちの意向をクロッキーがまとめてくれた。結果はクープに参加を希望する者がほとんど。一族全員で参加を申し出たのは、ライオン、チータ、トラなどのネコ族、他にレッドパンダ一族とクマ一族だった。しかし、どうしたことかクマ王のベアトリッチ殿からは返事がない。一族全員ではなくその中の代表者のみが参加を申し出たのは、ゾウ、サイ、カバ、キリン、トナカイ、ラクダなどの草食動物だった。彼らは猛獣たちに食われる心配のない今の環境に満足しているものが多いためかもしれない。また鳥たちは基本的には興味を示さず、参加するものもいるかもと、消極的だった。しかし地上を這い回っているクジャクだけは参加を希望。なによりも真っ向からクープに反対するものはいなかった。

アタイはクープ評議員を集めて今回の調査報告を検討した。評議員の中には有無言わず全員を参加させるべしという強硬論もあれば、参加意思のあるものだけ参加すればいいという標準的な意見もあった。話し合いの結果、今回はとりあえず参加意思を示した動物のみの参加を認めることにした。そしてカラスのクロッキーたちに話し合いの結果を動物たちに伝えてもらった。一方、テレボイスを使える職員たちは明日 15 時にこの場所に来てもらうことにしたが、彼らに対応する手順を相談した。その結果、最初に各評議員が自

己紹介をし、アタイがクープ互助同盟について説明した後、同盟の趣旨に賛同する職員には残ってもらい、そうでない職員は解散してもらうことにした。

こうして動物互助同盟クープは収容キャンプの動物を含めて大きな組織になった。アタイはクープ会長、ボロンは副会長、アライグマのラックは書記、カラスのクロッキーは渉外などの役職が決まった。会議日には近隣の動物評議員は公園の野外休憩所へ集合し、一方、収容キャンプの動物たちは賛同職員の準備するオンラインで参加することになった。そこで出た意見を基にキャンプ職員は収容キャンプの待遇改善の他に、メトロバンクーバーの動物保護政策の改善に努力してもらうことになった。このプロジェクトが実現すれば、動物たちの処遇が改善されるだけでなく、障害動物の福祉も増進し、さらに多くの動物達に救援事業が適応される可能性がある。そしてテレボイスを使える大ネコたちの参加が増えることで、動物と大ネコたちとの意思疎通がよくなる。そして動物世界と大ネコ世界が共存できる豊かな環境が開けると期待してる。こんなアタイの夢がかなう日がいつくるのかな。ねえ、ボロン。なに寝てんだよ！<おしまい>